

01：性欲ゼロの二十歳の俺の、平和すぎる日常

——その日はいつもと変わらない、けれど少しのワクワクがあるだけの夜になるはずだった。

性欲が、俺にはない。

二十年生きてきて、いまだに性欲を感じたことがない。

ちなみに、恋をしたこともない。性欲と恋愛は必ずしも同義ではないと思うが、性欲と恋愛で支配される思春期特有のどうしようもない衝動が、俺を襲うことはなかった。

十代のころ性欲に支配される友人から、学年一の美人がAV女優に激似でヤバイと動画を見せつけられたが、興奮することはなかった。

それについて特に悩んだ記憶はないけど、羨ましくはある。

女性の裸を見て興奮する友人や片思いに頬を染める友人、恋人と人目もはばからずイチャイチャしている様子を見ると、とても楽しそうで幸せそうだったから。

自分が体験できずにいる経験を友人たちが積むことで得るものがどんなものなのか知りたくて、恋愛小説や官能小説を読み漁ったが、残ったものはやはり羨ましさのみ。未知の世界への好奇心が募るばかりだった。

そんな性や恋愛に対する思いを心置きなく話せる二人の友が俺にはいる。幼馴染で親友で、もはや家族な二人はバイとゲイ。

幼いころから活発で自信に満ちた二人は、頼もしくて尊敬できる存在。そんな二人に対して、控えめで言葉数の少ない俺は、なぜいつも三人で一緒に居るのか周りから不思議に思われていたらしい。当の本人(俺)は、親より自分のことを理解してくれる頼れる二人のそばから離れるという選択肢はないほどに、幼馴染の二人のことを信頼している。

二人は何のためらいもなく、自分自身の性を自覚しても隠すことなくオープンだった。だから選択肢の一つとして同性との恋愛やらなんやらのハードルはなく、女性に対して性欲が湧かないなら男性はどうだと言われて考えてみた。けれど、女性にも男性にも性欲が湧き上がることはなく、俺の思春期はあっという間に過ぎ去っていった。

そして、俺こと市来朔太郎(いちきさくたろう)は、二十歳になりました。大学生になり、ようやく俺の性欲は爆発するのでは！？なんてことはなく、俺によく似ていまだに大人しく過ごしております。

大学生といえばハッピーラブスクールライフの幕開けだ！ということで、ひとり暮らしをしようと思っていたんだけど、みんなに反対された。なぜ。——答えは一つしかなかった。

俺には生活力がないらしい。しかたないと、頼れる幼馴染たちが、一緒に暮らしてくれることになった。それならばと両親も納得してくれた。解せん。

しかし、恋愛対象になりうる同性愛者である幼馴染たちと、一緒に暮らすとなると若いからこそその爛れた生活になってしまうのではという心配が生じてしまうところだが、そんな心配は一切無用だ。

翔一や晴香にとって、俺は家族であり、それ以上でもそれ以下でもない。親や子や兄弟のように、お互いに愛情はあるが無償の愛なのだ。母親同士の集いで仲良くなり、生まれた時から一緒に翔一と晴香と俺の三人は、それぞれ一人っ子ではあるが兄弟そのものでしかない。これは変わる事のない三人の絆である。

そして、本当に俺には生活力がなく幼馴染に助けられることばかりなので、両親ともどもとても感謝しております。

幼稚園から高校まで長い時間を共に過ごし、お互いの良いところもダメなところも熟知している。理解し尊重し合える関係だからこそルームシェアまでできてしまうというわけだ。

「ねーえ、翔ちゃんっ！ また、僕のボディクリーム使ったでしょ！？ 使うのは別にいいけど、ちゃんと戻しておいてよーっ！ どこに置いたのお？」

朝から同居人で幼馴染の晴香がぷりぷり怒りながら、脱衣所からリビングに届くように大声を上げる。

榎並晴香(えなみはるか)、名前と口調にマッチしたとても可愛い男。美容系の専門学校に通う美容男子で、男として美を追求したいらしい。彼の日々の努力には、尊敬の念を抱かずにいられない。好みのタイプは、ゴリゴリのマッチョとのこと。

「はあ？ 二段目の棚にあるだろ。ちゃんと見たのか？」

洪々と大声が上がる脱衣所に向かうのは、もう一人の同居人。

牛尾翔一(うしおしょういち)、みんなの頼れるお兄ちゃん。口は悪いが、賢くて優しくて頼もしい彼は男女両方からモテモテだ。頭は良かったのだが、勉強には特に興味がないらしく進学はせず、おしゃれな隠れ家バーでバーテンダーとして働いている。学生時代から彼氏も彼女も途切れたことがない。現在は、三十代のイケメンお兄さんとラブラブだ。とても素敵なカップル。微笑ましい。

「なーいーよー！ どこー？」

俺のいるリビングまで、いまだに晴香の大声が響いている。脱衣所にたどり着いた翔一は何の迷いもなく棚の中からお目当てのものを手に取り晴香に渡す。

「おいあるだろ、ここに。ほら」

「うそー。ちゃんとさっき見たのにー」

晴香は少し片付けが苦手で、出したものを片付けられなかったり物をよくなくす。そのたびに翔一に怒られている。今日も頭を小突かれていた。

「使ったら同じ場所にしまえばなくならねーし、わかんなくならねーんだよ。ほんとに、お前は。まあ、それは置いといて。これ、めちゃくちゃ良い匂いだな！ 俺も使うわ」

翔一は見た目クールでそんなこと気にも留めない感じに見えるが、実はボディケアには余念がない。男性と付き合う時ほど気をつけているらしい。

「でしょ？ しかも、匂いだけじゃなくて、ちゃんと保湿も最高なんだよー！ 翔ちゃんも使うなら、ストックも買っといてよね」
「はいはい」

何はともあれ仲良しだ。晴香の用件が片付いたので、翔一はリビングに戻ってきた。

「朔は今日は午後からだっけ？」

朝食の続きをはじめる翔一。パンを頬張りながら俺は頷く。

「せっかく午後からなのに朝からきちんと起きて、身なり整えて、朝食を食べて、いい子ちゃんかお前はっ！」

そう言いながらにこにこと翔一は、ダイニングテーブルの向かい側に座っている俺に手を伸ばし、わしゃわしゃと頭を撫でる。髪の毛は乱れたが、特にセットしているわけでもなかったので俺は気に留めず、そのままパンにかじりついた。

「お！ 無造作な感じがなんか逆におしゃれさんな感じになったぞ」

くくっと笑いをこらえてる翔一にやられっぱなしは癪なので、テーブルの下ですねを蹴ってやった。「いてえよ」と笑みをこぼしながら、再び俺のほうへ伸ばした手を俺は無言でよける。他愛無いつもの朝のやり取り。実家以上の穏やかさでいつものんびりしてしまう。

「朔ちゃん、髪ぼさぼさじゃん！」

晴香がメイクも着替えもばっちりにはリビングにやってきた。俺は翔一に乱された髪の毛をそのままに、いまだにゆっくりと朝食をいただいていた。

そんなぼさぼさ頭の俺の後ろに立ち、流れるように手櫛で髪の毛をさつと整えて横に座る晴香に、俺は頬に朝食を詰めながら眉間にしわを寄せて顎で翔一を指す。

「もお、翔ちゃん。朝から朔ちゃんにいたずらしないの！」

俺の代わりに翔一に文句を言う晴香の前に皿に乗せたパンを置き、サラダを取り分けてやった。いーぞ、いーぞ、もっと言っただれ。心の中で、俺は晴香にエールを送る。

「いたずらじゃありません一つ。愛でただけです一つ。朝はまず朔を愛でねーと始まらんだろ」

謎の言い訳をする翔一に、晴香は少し考えてこくこくと頷く。俺の味方に付いていたはずの晴香はいつの間にか翔一陣営に落ちていた。
「うん、その気持ちはわかる。それなら仕方ないか」

謎の意見の一致に、頬に詰め込んだものを咀嚼しながら翔一と晴香を交互に、俺は睨んでやった。ようやく咀嚼を終えた俺は、ふうーと長めのため息を吐いた。
「意味わからん」

ふたりから視線を逸らし、ぼそりつつぶやいた俺へ慈しむ瞳を向けられていたことは、スルーすることにした。反応すると面倒なので。いつものことだし。

やはり俺たちの関係は仲良し三人兄弟で、そして俺はまさしく末っ子だ。なんでだよ。